
クリスマスの奇跡

服部航海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスの奇跡

【Nコード】

N0879D

【作者名】

服部航海

【あらすじ】

幸せだった家族に突然訪れた不幸。しかしクリスマスが最後の願いを叶える。

(前書き)

二作目です。どうぞー!!

今日はクリスマス

街はイルミネーションで輝いていて家族や恋人達であふれている

義樹は人ごみに外れたベンチに座っていた。

凍えるように寒かったがクリスマスはいつもこの場所で人ごみを眺めていた。

義樹はあの出来事を思い出した。

「とうさ〜ん！」

義樹は小さい頃から父が大好きだった。

休日も仕事から帰ってきて疲れているはずなのに毎日のように遊んでくれる父が大好きだった。

そして義樹の1番の楽しみがクリスマス。

父はいつもより少し遅く帰ってくるとサンタのかっこうをして玄関から入ってくる。

「メリ〜クリスマス!!」

義樹は父に飛びついた。

「義樹君！いい子にしていたかな？」

サンタの父は義樹を見た。

「うん！！」

義樹は元気よく頷き答えた。

父は優しく義樹の頭を撫でた。

「じゃあ、はい。プレゼント」

義樹はニッコリ笑い言った。

「サンタさん、ありがとう！」

義樹はプレゼントをもらい居間へと走っていった。

父もサンタの格好を着替えるために玄関を出ようとするとまだ料理をしていた母が出てきてこっそりと言った。

「タマゴが足りないの。外に出るついでに近くのスーパーで買ってきてくれませんか？」

ケーキはいつも母の手作りと決まっている。

「わかった」

父は優しく言い玄関を出て言った。

母は料理が完成し一息入れた。

「よし。あとはケーキのみ」

すると電話が鳴った。

母は、玄関の廊下に行き電話に出た。

義樹はプレゼントを開けた。

中には義樹の好きな戦隊ヒーローのロボットが入っていた。
義樹は嬉しくなり遊び始めた。

しばらくすると母が急いで着替え始めた。

「義樹！ちょっと家出るから静かに遊んでね！」

優しく言う母の目は今にも泣き出しそうだった。

ボタン！！

母は家を出た。

義樹は訳が解らず黙っていた。

しばらくすると玄関が開く音が聞こえた。
そして居間のドアが開いた。

そこには父がいた。

いつもなら義樹を見て最初にニッコリ笑ってくれるはずなのに少し暗い。

父はゆっくりと義樹に近づき、義樹の隣にあぐらをかいた。

「父さん。どうしたの？」

父は無言のまま義樹の持っていたロボットを取り上げロボットの後ろ部分をいじり始めた。

義樹が黙って見ていると父はやつと口をひらいた。

「義樹……ごめんな。最後まで一緒にいれなくて」

ロボットに父の涙が落ちた。

ロボットを置くと父は義樹を見た。

義樹は初めて父の涙を見た。

「信じられないかもしれないけど父さん、車にひかれて死んじやったんだ。でも死ぬ前に家族に会いたって言ったらサンタさんが連れて来てくれたんだ」

父は溢れ出る涙をこらえて続けた。

「義樹。もう父さんいないけど、母さんと楽しく暮らすんだぞ！
母さん自分のせいだって悲しむから義樹が父さんの分まで支えてや

つてくれ……」

父は涙をこらえきれず義樹に抱きついた。

「お前にもっといろんなこと教えてやりたかった。成長したお前を見ていたかったなあ」

父はずっとずっと義樹を抱きしめた。

義樹は信じられなかった。

父はここにいるし温もりも感じるのにいないなんて。

しばらくすると義樹の肩を優しくつかみ、まっすぐに義樹をみた。

「強く生きるよ、義樹。母さんを大切にな。父さんの最後の頼みだ。わかったな？」

義樹は頷いた。

父はやっと義樹にニッコリとして頭を撫でよとした。

しかし、手が義樹をすりぬけた。

「もう時間だ。今まで楽しかったぞ。父さんとの約束守るんだぞ」

父は立ち上がり居間のドアを開けた。

「父さん。行かないで」

父は足を止め振り返り義樹に言った。

「父さんはいつもずっと義樹の側にいるから」

父はもう一度ニツコリと笑いドアを閉めた。

あの時なぜ自分は泣かなかったのか不思議に思う

あれから15年。

義樹は毎年、クリスマスはこのベンチに座っている。

あのあと父の事故にあった場所がこの通りで家族三人で暮らしていた家も見えるのがこのベンチだった。

ここにいと近くに大好きな父さんがいるような気がする。

とくにクリスマスの日は

義樹はバックからある物を取り出した。

それは父が最後のクリスマスにくれたロボット。あの日から大事にしまっていたのを持ってきた。

ロボットを眺めていると、後ろのパーツが外れて雪の地面に落ちた。

もう15年も経ってるからなあとパーツをひろいあげ、ロボットのうしろ

をみると中に紙が入っていた。

義樹は紙を取り出し半分に折れた紙を広げた。

大切な母さん、義樹へ

ありがとう

父より

父の字だった。

義樹は頬に涙が伝うのを感じた。

涙が出ないようにと顔を上げた。

小さな雪達が降る星空にトナカイのソリに乗ったサンタが走っていた

(後書き)

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0879d/>

クリスマスの奇跡

2010年12月8日17時10分発行